

チェコ語母語話者の日本語学習における発音分析

カレル大学哲学部博士課程

石田 薫

0. はじめに

本稿は、2019年10月19日国際交流基金ブダペスト日本文化センターにて行われた「ハンガリー日本語教育シンポジウム 2019」での発表をもとに作成された報告書である。当日の発表では、主にチェコ語母語話者の日本語学習者の発音の間違いとその原因について報告し、指導改善策についての考察を述べた。シンポジウムでは「チェコ語母語話者の日本語教育における発音指導」と題して発表を行ったが、発表後、発表タイトルと発表内容の相違を感じたため、本報告書では「チェコ語母語話者の日本語学習における発音分析」と改題した。

報告書も発表同様、まずチェコ語の発音の特徴を紹介した後、チェコ語母語話者は日本語を学習するにあたって問題になってくる発音を指摘し、最後に発音指導改善への提案と考察を述べる。

1. チェコ語母語話者と日本語の発音

1.1. チェコ語の発音の特徴

チェコ語は現在、チェコ共和国の公用語として使用されている言語である。インドヨーロッパ語族の中のスラブ語派に属しており、格変化や動詞の活用、語彙などはロシア語やポーランド語など、他スラブ語と多くの点で共通、類似している。本項では他スラブ語とも比較しながら、チェコ語の発音の特徴について述べる。

チェコ語の母音は日本語と同じ[a] [e] [i] [o] [u]の五つである。発音もほぼ同じであるが、[u]が円唇母音である点が日本語とは異なる。各母音が長母音となる点も、日本語と共通している。

子音は両唇音の[p] [b] [m]、唇歯音の[f] [v]、歯茎音の[t] [d] [n] [s] [z] [c] [r] [ř] [l]、歯茎硬口蓋音の[š] [ž] [č]、硬口蓋音の[tʃ] [dʒ] [ŋ] [j]、軟口蓋音の[k] [g] [x]、そして声門音の[h]、以上の25音である。このうち、特にチェコ語特有の発音として挙げられるのが[ř]である。これは巻き舌音[r]を発音すると同時に[ž]（ジュ）を発音してみると、非母語話者でも違和感のない発音になるが、他スラブ語にも存在していない発音である(注 1)。もう一つ特徴的な発音は軟口蓋音の[x]と声門音[h]の違いである。音声記号[x]の文字表記は「ch」であるが、[h]（文字表記も「h」）と非常に近い音であり、チェコ語とスロヴァキア語以外のスラブ語にはこの違いはなく、[x]のみが存在する。

チェコ語はアルファベットによる表記と発音がほぼ一致している言語で、英語のように同じ母音の表記で複数の読みを持つ、ドイツ語のように二重母音が特有の発音をする、といったことはない(注 2)。例外としては、子音の読みの変化が上げられる。日本語の「ツ」の発音にあたる子音は音声記号でもアルファベットでも「c」であるが、「t」と「s」が隣り合わせのつづりでは「c」と同じ発音になることが多い、といった現象などがある(注 3)。

1.2. チェコ語母語話者にとって日本語の発音とは

前述したように、チェコ語の母音の数は日本語と一致しており、それぞれが長母音になる点も共通している。日本語を学習し始めたばかりの初級者の反応は「日本語は発音しやすい」というのが一般的である。学習初期で理解が難しいのは、促音および撥音の長さであることが多い。そしてチェコ語話者にとって、音声学習において発音より問題が大きいのはアクセントとイントネーションである。しかし、特に日本語母語話者との会話において、相手の発している音が聞き取れない、相手にとって違和感のある発音をしてしまう、といった現象が起こっていることも事実である。第2項、第3項では、チェコ語と日本語の間にある発音の違いと、それが原因で起こる間違いについて述べる。

2. チェコ語にあって日本語にはない発音

チェコ語の母音は[a] [e] [i] [o] [u]の五つであることはすでに述べたが、[i]の表記文字に関しては「i」「y」の二文字があり、「d」「t」「n」に後続しない限り、発音は同じである(注4)。一般に、「i」は「柔らかいイ」、「y」は「硬いイ」と呼ばれ、母語話者でも、年少時の学校教育ではつづりの暗記に苦勞すると言われる。日本語母語話者がチェコ語を習得する場合、「di」は「ヂ」、「dy」は「ディ」、「ti」は「チ」、「ty」は「ティ」と覚えて発音すれば、かなり近い音が出せる(注5)。

問題になってくるのは「ni」と「ny」で、日本語母語話者には聞き分けにくく、どちらも同じ「ニ」に聞こえてしまう。二種類の「イ」にそれぞれ名称が付いていると、母音で違いを表現するのかわかれるが、実は「ni」と「ny」の違いは子音に起こる。チェコ語の子音には「n」の上に谷型の記号の付いた硬口蓋音[n̠]があるが、「n」に「i」が続くときは、子音は[n̠]と同じ発音になる。[n̠]とはどのような発音なのかというと、日本語の「ニュ」の母音を無声化した音である、という説明が日本語母語話者には一番理解しやすいと思われる。つまり、チェコ語の「ni」は日本語のニヤ行のイ段、ということになる。「ny」は、日本語で言うとナ行のイ段の硬口蓋化が起きていない音と考えればよいので、子音[n̠]に従って歯茎音、「ni」は硬口蓋音、日本語の「ニ」は歯茎硬口蓋音、つまり「ni」と「ny」の中間の音であり、厳密にはどちらの発音とも異なる。

学習者から日本語の「ニ」は「ni」なのか、それとも「ny」なのか、という質問をよく受けるが、母語話者にはいずれにしても同じように聞こえてしまうので、どちらでも出しやすい音を出せばよい、と指導している。

3. 日本語にあってチェコ語にはない発音

3.1. 発音のローマ字表記の影響

チェコ語に存在しない日本語の発音について言及するにあたって、まず発音のローマ字表記の影響について指摘したい。外国語として日本語を習得しようとする場合、まず仮名の読みや発音を母語で使われているアルファベットによる表記を頼りに学習を進めるのが一般的である。母語で文字とその音声の結びつきをすでに習得した学習者にとって、新たに外国語の文字を覚える際、それは当然の学習の進め方であろう。しかし、ひらがな、カタカナを習得した後でも、その音声をアルファベットで覚えた影響が残る場合が多い。

これは何もチェコ語母語話者に限った話ではない。ここに他言語話者、特にラテン語表記から派生したアルファベットを使うヨーロッパ語話者にも起こると思われるアルファベット表記の影響の例をいくつか挙げてみる。ラ行の子音は「r」で書き表されるが、英語やフ

ランス語などを例にとっても分かるように、「r」は言語によって異なった音声を表すことが多い。チェコ語の場合は[r]は強い巻き舌音で、ラ行を学習者自身が発音する際には、不自然な発音かもしれないが、日本語話者に通じないことはない。問題は母語話者を聞き取る時に起こる。母語話者のラ行は時には[r]、時には[l]や[d]に聞こえることもあり、何を言われているのか分からなくなってしまう。「フ」も「fu」と書き表されるのが一般的であるが、唇歯摩擦音の[f]で発音されると、日本語としては不自然な響きになる。日本語で唯一母音を伴わない撥音も、アルファベット表記を追っている限り、苦手とする発音である。母音やナ行が後続すると、その後続する音につなげてしまい、「キンエン」を「キネン」、「コンニチワ」を「コニチワ」と読んでしまったりする。この間違いは、日本語を仮名表記で学習し始めると減少する。

3.2. チェコ語母語話者が日本語で苦手とする発音

ここからは特にチェコ語話者に起こりやすいと思われる日本語の発音の間違いとその原因について見ていきたい。まず最初に挙げるのは「ワ」の発音である。チェコ語には半母音「ワ」[w]がなく、外来語のみ「w」が使われ、[v]（有声唇歯摩擦音）と同じ発音で読まれる。日本語上級者になっても、「ワ」を「va」と発音する癖が残ることもある。

次に挙げるのは第1項でも触れたスラブ語ではチェコ語とスロヴァキア語にしか違いがないと言われる「ch」と「h」である。「ch」は独立した一つのアルファベットで音声記号は[x]、軟口蓋音である。[k]や[g]と同じ位置から強く息を吐き出すように発音する。「h」は声門音で音声記号は日本語の（「ヒ」「フ」以外の）ハ行と同じ[h]である。日本語母語話者にとって「ch」と「h」の違いはとても聞き取りにくい。日本語の「ヒ」は硬口蓋化が起こり、子音の音声記号は[ç]になるが、この発音はチェコ語には存在しておらず、チェコ語母語話者には「ch」に聞こえる。学習者は[ç]を[x]に置き換えて発音するので、例えば「ヒト」を[chito]（音声記号では[xito]）といったように、母語話者が違和感を覚える発音をすることがある。

本項で最後に取り上げたいのが、無声音の有声音化である。学習者の発言や音読を聞いていると、助動詞「です」に接続助詞「が」が後続するときに「dezuga」と、「ス」の「s」を有声音化してしまうケースが頻繁に起こる。類似したものでは「できます」を「degimasu」と読んでしまったケースもある。これは、母音を無声化し、チェコ語の「無声音の前で有声音は無声音に、有声音の前で無声音は有声音になる」という法則を無意識のうちに適応させてしまい起きるのではないかと思われる(注6)。

4. 発音指導改善への提案

ここまでチェコ語母語話者が日本語を学習するにあたって起こりやすい発音の問題点について述べてきたが、このような問題が起こるという事実をふまえた上で、どのような指導を実践していけばよいのだろうか。

第3項で挙げた発音の間違いにも、具体的に改善指導が可能なものと、指摘しても直しにくいものがある。母音やナ行音の前の撥音を無視してしまう傾向は、仮名を覚え、モーラ概念を理解すると、改善されることが多い。対して、厳密にはチェコ語には存在しない「ヒ」や「フ」といった発音は、言葉で注意されても、学習者自身、どのように違う発音をしたら良いのか分からず混乱してしまう。母語のチェコ語とは違う発音なのだ、という話を聞かされ

ても、具体的な対策にはならないし、あまり注意しすぎて、学習意欲を減退させては逆効果である。

チェコ語に限らず、どのような言語を母語としていても言えることだが、やはり学習者と同じ母語を持つ目標言語習得者の意見、考え方、そして経験を大切にすべきではないだろうか。外国語を学習する際、母語話者は教師として重宝されがちだが、学習者の母語の発音や文法体系を深く理解せず教えていけば、間違いの原因をつかめない、もしくは原因がわかっているにもかかわらず、具体的にどう指導したらいいのかわからない、といった壁にぶつかることもあるだろう。その点、学習者と母語を同じくする非母語話者語学教師は自らがどのように目標言語を習得したのか、どのように理解を深めていったのか、といった体験をふまえて指導することができる。母語話者語学教師も、そういった目標言語習得者の意見や体験を尊重し、学習者に紹介し共有することで、学習者にとって何が問題であるのかを把握することができる。

そして学習者自身も、常に発展していて、学習していく中で様々な気づきを得る。特に音声に関しては、発音もアクセントやイントネーションも、多くのメディアで日本語を耳にしてきた学習者のほうが自然な発話をよりスムーズに習得している。具体的な発音の注意点の指導も時には大切だが、学習者に自発的に日本語に触れる機会を増やしてもらえよう工夫するのも教師の役割であろう。

5. おわりに

2019年10月のシンポジウムでの発表では、チェコ語母語話者が日本語の発音を学習する際、問題になる点を挙げ、その具体的な改善策を提示することを目標としていたが、個々の間違いの修正方法を考案しても、学習者自身の自覚がない限り、学習者の確実な進歩につながるとは考えにくい、というのが発表を終えた現時点での結論である。母語で使用される発音と表記文字を習得してから第二言語(外国語)として日本語を学習する場合(日本国外の日本語非母語話者の学習者の大多数に当てはまると思われるが)、母語の影響を完全に避けて学習を進めるのは現実的ではない。むしろ母語を利用して、学習者が違いに気づいていけるよう促すのが、理想的な教師のあり方ではないだろうか。

注

- 1) ポーランド語にも、かつて[r̩]と同じ発音が存在しており、表記は「rz」であるが、現在では[z]と同じように発音される。
- 2) チェコ語にも二重母音による読みの変化があり、「ou」と、特に外来語のつづりに見られる「au」「eu」の「u」が半母音になる法則がある。
- 3) 「ts」を「c」と同じように読むよう、学習させられるものではなく、発音しやすい読み方として自然習得される。
- 4) 外来語の場合、「d」「t」「n」の後でも、「i」を「y」のように読むこともある。
- 5) 厳密には「či」が日本語の「チ」に最も近い発音である。
- 6) 例としては「kresba」は[krezba]と発音される、「hádka」は[hátka]と発音される、といったものが挙げられる。語末の有声音も無声音に換わるので、「vklad」という単語は無声音化を二つ含み、[fklát]と発音されることになる。

参考文献

Čechová, M. a kol. (2011) Čeština - řeč a jazyk. Praha, SPN.

Černý, J. (2008) Úvod do studia jazyka. Olomouc, *Rubico*.

小林正成、桑原文子 (2002) 『現代チェコ語日本語辞典』東京、大学書林

Krčmová, M. (2016) Úvod do fonetiky a fonologie pro bohemisty. Ostrava, *Ostravská univerzita v Ostravě*.

松崎寛、河野俊之 (2009) 『NAFL 日本語教師養成プログラム・日本語の音声 I・II』東京、アルク